

21世紀におけるフィリピンの高齢者 人口変動の課題と対策

バージリオ・アグイラ フィリピン・ラサール大学准教授

フィリピンでは21世紀に入って、これから人口がどうなっていくのだろうか、それに対して私たちはどのように対応していくのだろうか。また、政府はどのようなアクションを起こすべきだろうか、といった議論が多く聞かれるようになりました。本日は、フィリピンでのこうした議論の背景についてご紹介したいと思います。



いまフィリピンで起こっていることは、日本の現在の少子高齢化とは幾つかの点で隔たりがあります。というのは、フィリピンでも高齢化現象は生じていますが、その速度は非常にゆっくりとしたものなのです。「低速度の高齢化」と呼んでいいかもしれません。

また、死亡率も徐々に上がっているのですが、高齢者が増えてその死亡者数が増加しているわけではありません。その大きな原因の一つは中絶の増加なのです。もちろん、妊娠中絶はカトリック教会としてはご法度です。しかし、いま、フィリピンの国会では、リプロダクティブライツ（性と生殖に関する自己決定権）、つまり中絶を選択できる権利を女性に与えるという法案が議論されています。

フィリピンでは、こうした中絶を巡る議論や高齢化のスピードが緩やかであることで、少子化、高齢化の問題が人々の目から逸らされているように思います。また、日本とは異なったところに焦点をあてていかなければならないとも思います。

先ほど申し上げたとおり、フィリピンの高齢化はスローペースで、ゆっくり進行しています。日本、シンガポール、韓国、台湾などよりも非常に遅いペースで高齢化しています。2000年にはフィリピンで65歳以上の高齢者が総人口に占める割合は3.8%でした。これは、同じ年に4.8%から6.3%の高齢者比率であった近隣のインドネシアやタイ、スリランカ、インドといったアジア諸国よりもはるかに低いものでした。

確かに現在のフィリピンは比較的若い人が多い人口構成です。おおよそ人口の

39%超は子どもから青少年の若年層です。ところが、65歳以上の高齢者も徐々に増えていきます。現在のアキノ政権が終わるだろう2016年ごろには、高齢者比率は7%強という、現状の2倍近くに上昇すると予測されています。そして、2040年までにはさらにその倍ぐらいになります。つまり、高齢者比率が14%程度に達し、フィリピンも「高齢社会」になると推計されています。

ここで過去の日本の経験に触れておくと、日本が高齢者比率を7%から14%へ倍加させたのは24年間（1976年～1990年）でしたから、フィリピンの倍加速度がおおよそ34年間と予測されていることは、そのスピードが緩やかなものと言えるでしょう。

こうしたフィリピンの比較的ゆっくりとした高齢者の増加は、良い面と悪い面の双方があります。まず、良い面としては、先ほどの小峰教授のお話にもあった「人口ボーナス」の期間が長くなって、それだけ経済を成長させる可能性が高まるでしょう。また、高齢者比率の上昇が緩やかなので、高齢者対策を考える時間的余裕があると思います。

一方で懸念されることの一つは、社会インフラの整備が遅れていることです。道路整備しかり、公共施設のバリアフリー化などもまだまだです。さらに、健康保険や社会福祉、年金、あるいは医療・介護制度など、まだ非常に遅れています。これは相当に難しい側面を含んでいます。

おそらく、これからフィリピンにおける高齢者問題の中で最重要視されるのは、制度設計の遅れている社会福祉だと思います。あわせて、高齢者の社会的保護の問題も大切になるでしょう。もちろん、高齢者や社会的弱者を公的に支えていくことについてはフィリピン憲法で保障されています。ただし、社会で高齢者を支えていこうといった気運はまだまだ弱く、実践面では遅れていると言わざるを得ません。

ところで、先にも述べたように2040年ごろになると、フィリピンの高齢者比率は14%程度に達すると予測されています。このころ、フィリピンの人口は1億4000万人超になりますので、高齢者数は2000万人近くになる見通しです。これは現状の社会整備の遅れを考えるとちょっと怖くなる数字です。

実は、2010年の段階でフィリピンの人口は9,700万人ほどですが、2050年になると1億6000万人に達し、フィリピンは世界で10番目に人口の多い国になっていくのです。人口の多い国の高齢化ですから、高齢者の絶対数が多いという憂慮すべき事態も生じるわけです。

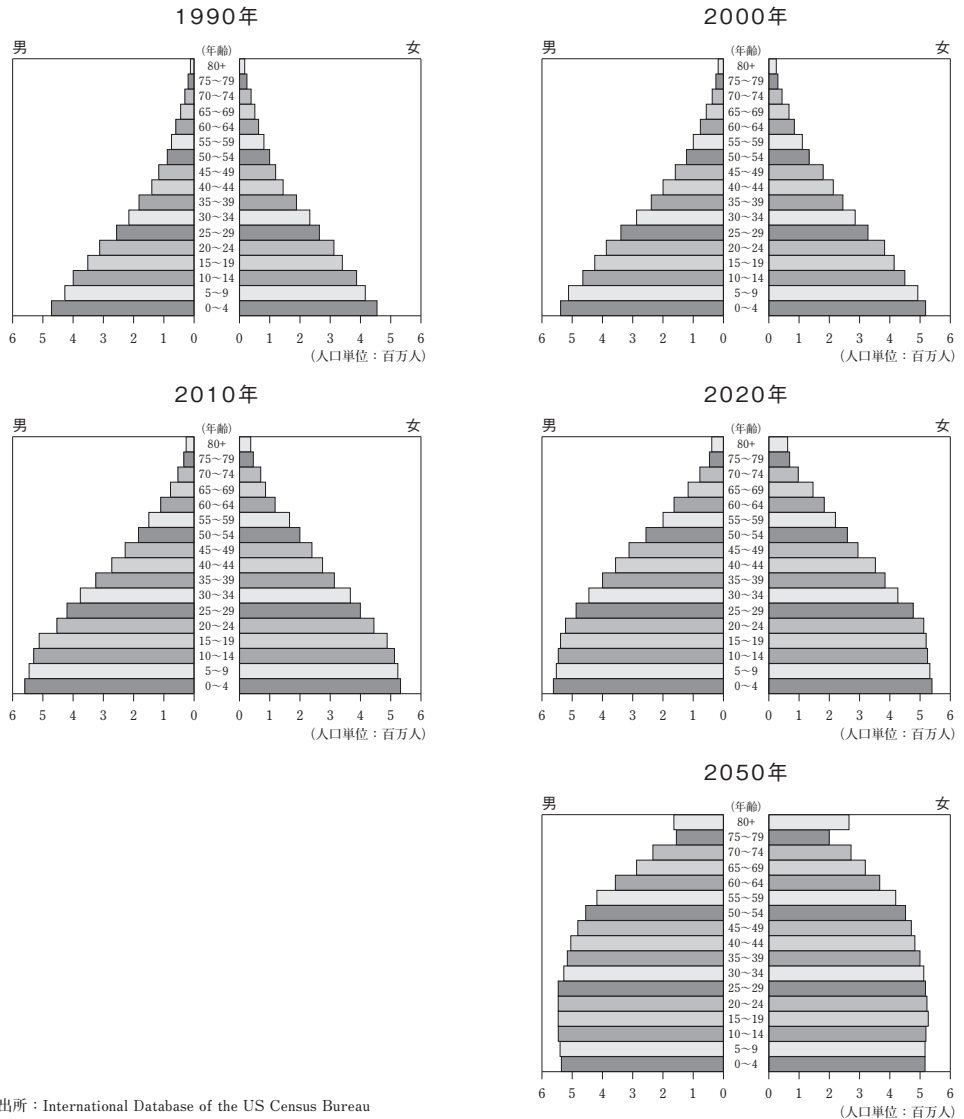
また、フィリピン人の平均年齢は1980年には22.5歳でした。2000年に24.7歳、2011年でも26.6歳でした。これが2040年には33.3歳になります。いまは若々しいフィリピン社会も、今世紀の半ばごろには、その平均年齢が中年になっていくのです。

平均余命（寿命）についても見てみましょう。2000年代前半（2000年～2005年）

にフィリピン人の平均余命は男性が64歳ちょっとです。女性は70歳を少し超えていました。現在は、男性が67.6歳、女性は73歳ぐらいです。ただし、今後2035年から2040年の間に男性の寿命は73歳に達します。女性はもう少し高く78歳以上になると予測されます。

つぎに、人口構成、いわゆる「人口ピラミッド」の未来図についても見ていき

図表01 フィリピンの人口ピラミッド (1990年、2000年、2010年、2020年、2050年)



出所：International Database of the US Census Bureau

ましよう（図表01）。1990年、2000年、2010年、2020年、2050年の年齢別人口構成比を確かめてみると、2010年代には緩やかながらも相変わらず若者層は増えていますし、同時に、高齢者の割合も徐々に増えていきます。2020年代になっても、まだ若者層は増え続けます。ただし、高齢者の比率が相対的に大きくなってきます。これが2050年になると非常に変わった



高齢者施設の利用者（講演者撮影）

形になります。丸みを帯びた茶碗のような形は、若者も多いけれど、それ以上に高齢者が非常に多くなることを表しています。

フィリピンの場合、若者、つまり働く人口、働ける人口が増えていきますので、小峰教授のご指摘にあった「人口ボーナス」を享受できる素地はあります。けれども、本当に残念ながら、働き口が足りなくて仕事にありつけない若者の失業者が多いのです。また、子供たちの貧困の問題も非常に厳しいものがあります。これらは根本的に解決しなければならない問題ですし、今後のフィリピンでは少子高齢化を支えるといった視点からのアプローチも必要となるでしょう。

おわりに、簡潔に今日のお話をまとめてみます。

ご紹介したように、フィリピンでは高齢者の増加がゆっくりとしています。ただし、これからは人口の増加と相まって、高齢者の数がどんどん増えていくわけです。一方で、高齢社会に向けた制度設計は遅れています。

ですから、いまの時点からフィリピン政府は何らかの手を打っていかないとはいけません。とくに、予防医学や健康管理、介護といった、高齢者向けのさまざまな社会サービスの充実を考えなければなりません。また、フィリピンの雇用状況（失業問題）は高齢者が増加する社会に対して非常に深刻な影響を与えるはずですので、早急に失業問題の解決を図る必要があるでしょう。

当然ながら、対応が遅れれば、対処が難しくなります。高齢者の絶対数が膨らむ前に、フィリピン政府がいま述べたような政策や福祉サービスを強化していかなければならないのです。

最後に一つ心強いことがあります。最近、フィリピンでは高齢者たちが自分たちの組織をつくって、政府に対し社会制度の創設や福祉サービスの充実を訴えるようになってきました。こうした高齢者自身のポジティブな動きに期待したいと思っています。

ご静聴ありがとうございました。

[Virgilio R. Aguilar]